2024年8月総評　暮田真名

霜の夜の誤字に修正液厚く
杢いう子

修正液のわずかな厚みを捉える目の確かさ。修正テープの普及によって、修正液はすこし詩の言葉に近づいたような気もする。外に積もった雪が修正液と重ね合わされていることは言わずもがなである。

秋風は液体・円柱の私
大西美優

汗ばみ、湿気の多い外気に溶け出してしまいそうな夏がおわると、とたんに己の輪郭がはっきりするのを感じる。自分とそれ以外の区別がはっきりして、それが秋に特有の寂しさにつながるのだろう。秋風の流れの遮蔽物のように抽象的に己を捉えた句。

記憶とはひかる馬らし獺祭忌
玻璃

正岡子規が自らの住まいを「獺祭書屋」と号したことから、その忌日を獺祭忌というらしい（お酒の「獺祭」もそこからきているとのこと）。獺祭とはカワウソが食べる前の魚を食べる前に並べておく様から、転じて詩作の際に多くの書物を広げることを指すようになったそうだ。子規、書物の作者、カワウソ、魚、たくさんの人物や生き物が歴史を駆け抜けるさまを「ひかる馬」に喩えた。

愛は循環しうるもの　春の別物
浪花小槙

「別物」という言葉の異物感に惹かれた。「循環しうるもの」という上句はむしろ生命が再び芽吹く春との同一性を強調しているようだが、下句では違いが強調される。春は自然物であるのに対して、愛は人造物だからだろうか。「ハンドメイドの春」として愛を捉える新しい視点が得られる。

冗談で済ませたいのに花が咲く
ときたま

「（話に）花が咲く」と補うととたんに理に落ちてつまらなくなってしまうので、ここはわざと真に受けて本当に花が咲いたのだと読んでみたい。この句で言われていることが、まさにその花の美しさだろう。

行楽の最後に残るふにゃふにゃの
紙コップなみに眠りかけてる
狛犬吠

あの紙コップは眠りかけているのか。眠ると次の朝がやってくる人間と違って、紙コップにとっては眠りとは捨てられること、すなわち死を意味する。生命（？）のサイクルが極端に短いものに喩えることで、不穏な気配が呼び出される。「波」を連想させる「なみ」の音にも注目した。

友だちが振られるたびに
新鮮な怒りふつふつ市場に並ぶ
汐見りら

「市場に並ぶ」に無視できないおもしろさがある。「新鮮な〜市場に並ぶ」という文字列からはどうしても魚や野菜を想像してしまう。怒りを託すならば、やはり赤身魚やトマトだろうか。失恋したばかりで悲しんでいる友達の代わりに怒ってあげるというありふれた景が色づく比喩。

雷が顔にもたらす可能性
太代祐一

雷、顔、可能性という無関係の言葉が「か」音の連なりによって結びつくおもしろさ。顔が雷に照らされて一瞬明るくなるという事態を「可能性」と呼ぶことには、なにか神聖さのようなものも感じる。

子供にも諍いのありカブトムシ

奥井健太

子供のすることなんてけんかばかりで、回数でいえば大人のほうが明らかに少ないのだから、「子供にも諍いのあり」はレトリックである。子供のけんかを「諍い」という大人の語彙で捉えることで、自らがもはや子供ではないことを再発見し、いささかノスタルジックな気持ちになるのだ。だめ押しの「カブトムシ」も効果的。

花丸の渦へ飛び込む休暇明け

檜野美果子

休暇明け、8月31日は子供の自殺がもっとも多い日で、しかも「飛び込む」とくれば、どうしてもそのことを想起してしまう。花丸とは常に大人から子供に与えられる評価であり、子供が巻き込まれている災禍の大きさに思いを馳せずにはいられない。